

# 建具の歴史

## ●日本独特の建築文化

建具というのは、戸・障子・襖など、すべて部屋を区切るために取り付けて閉閉するものの総称です。この建築様式は日本独特のもので、西欧の建築に対する考え方とは、根本的に異なったものであることを示す、良い見本だといわれています。

一般的には、西欧は石の文化、日本は木と紙の文化という表現で比較されることがよくあります。この比較は、双方の自然に対する考え方の違いからきています。

古くから西欧では家を自然に対抗するものとして位置づけているのに対し、日本では家

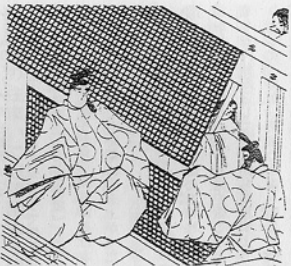
も自然の一部と見なしたためです。つまり、高温多湿な日本の風土では開放的な構造が必要だったので。

現在のように夏でも冬でもエアコンが活躍している時代と違って、昔は蒸し暑い夏には障子や襖を明け放って風を取り入れ、冬は襖、障子、雨戸を閉めて寒さをしのぐという、簡単に素朴な方法により人々は自然に対処したので。

さらに、木材を使う理由としては、種類、量ともに豊富な木材資源があったことや、地震対策には木造の方が有利であったことなどが考えられています。

さて、最近では日本の生活スタイルも欧米化が進み、住居も洋風建築が多く見受けられるようになりましたが、洋風とはいわゆるもの、少なくとも一間くらいは畳の部屋があり、その中で「動く壁」といわれる障子などの建具はしっかりと生き続けてきました。

## ●平安時代に生まれた建具



襖障子に用いられた戸

人集団として成り立っていました。

建具の原形は、中国から伝えられた屏風や衝立にあるといわれています。現在見られるような引き戸スタイルの建具が登場したのは、平安時代（七九四〜一九二）に入ってからだといわれています。当初は外部とは襖戸で、内部は屏風や衝立で仕切っていましたが、次第に独立した部屋としての機能が必要となり、木の骨組みに板、紙、麻、絹などを張った日本独特の建具が誕生したのです。

全面を紙張りした明障子は、室内への明りとりとしては便利なものですが、風雨に弱かったため、あまり使われませんでした。

鎌倉・室町時代（一一九二〜一五七三）になって、雨のかりやすい下の部分に腰板のついた「腰付障子」が工夫されると、貴族・武家・僧侶の住まいに急速に普及していきま

建具を専門に作る職人は、時代や地方によって「建具屋」「戸障子師」「建具師」「戸屋」とさまざまな名前と呼ばれました。いずれにしても、江戸時代（一六〇三〜一八六七）初期に大工の一部が指物師、建具師へと

職業化し、江戸時代の中頃には独立した職